

SF 的読み解き
子どもという風景

第三十五回　メデイアの幻想

堀内 守

かすがい

かつて「子はかすがい」という諺を耳にしたことがある。どんな場面だったか、いちいちおぼえてはいない。

「かすがい」なるものがどんなものなのか、実物を見たのはかなり後のことだった。

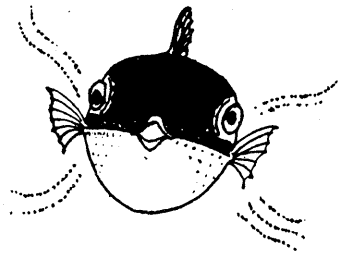
「かすがい」とは漢字では「金ヘン」に「送」と書く。材と材をつなぐ両端の曲った金具のことである。

実物を見れば「ナーンダ、あれか」というようなものだ。それなのに「かすがい」に予想以上の重い意味がま

つわりついているように思われたのは、「子はかすがい」ということは常ならぬ雰囲気の中で交わされていたからだろう。

何か事件があったようだ。事件はしばらく続き、やがて收拾されたらしい。そんな話題がひそひそ声で語られていた。そんなときに「やっぱり『子はかすがい』っていうからねえ」というように、感嘆あたわざる調子で大人たちがうなずき合っている。

大体何を意味するのか、子どもでも推定できた。



あの雰囲気の「かすがい」とくらべると、本物の「かすがい」は無骨な金具に見えた。「金ヘン」に「送」と書く漢字は、ふたたびあの重々しい雰囲気の「かすがい」を暗示しているように見えた。何を「送」るのであろうか。

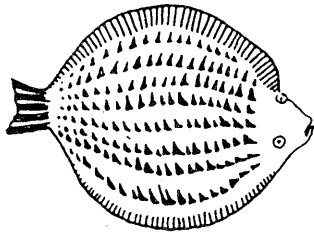
諺の方は、二つのものを堅く結び合わせるものたえに使われている。漢字の方は「送る」方を強調している。「結ぶ」力と「送る」はたらき、実は同じことの別の表現とすべきだろう。

メディア

「かすがい」が目に入らなくなった。

でも、よく考えると、あの素朴な「かすがい」は、いつのまにやら抽象的な姿に変わってしまい、「メディア」としてやたらに目に入るようになった。あまり数が多いものだから、それと意識されずにまわりにある。

「メディア」には、あの世とこの世をつなぐ霊媒の意味もある。そういうレベルの意味から、今日のテクノロジーの権化ごんけのようなハイテクにいたるまで「メディア」



は多様な姿をとるにいたった。

してみると、「子はかすがい」は、もっと表現を変えて、「子はメディア」とでも言い換えてみることもできよう。

ではどういう意味で「子はメディア」なのか。

グーテンベルクが発明したということになっている印刷術なしには、あるいはもっと新しい形の電波による映像メディアなしには今日の社会は成り立たない。それと同じように、コンピュータなしには存在しない社会がはじまっている。

コンピュータもメディアなのだ。

霊媒のように、それは畏敬されたり、畏怖されたりした。無限の力があるかのように喧伝けんでんされたり、大したことではない、単なる「計算機だ」と見なされたりしたこともある。

でも、そういう見方は遠く去った。短かい間に、コンピュータは、「メディア」であることがはっきりと知られてきたからである。コンピュータを「メディア」と解

してみる。それではじめて世界が理解できるようになるだろう。

まず、その場合の「メディア」には三つの意味がある。コンピュータは、(1)機械と機械をつなぐメディアであるし、(2)人間と機械をつなぐメディアであるし、(3)人間と人間をつなぐメディアでもある。この三つはいっしょに出現する。

「ニュー・メディア」という窓口も、このような枠組で理解される必要がある。「窓口」というのは一つの比喩である。

ある見方によれば、コンピュータは、まだ使用法がむずかしい。別の人によると、コンピュータは格段に使いやすいくなり、身近なものになったという。

フレンドリー

人間とコンピュータをつなぐ関係がフレンドリー(友好的)であるか、ないか。それは多分に示唆的だ。コンピュータが使いにくいならば、こちらから近づいてい

て、フレンドリーな関係にしてしまえばよろしい。現在の子どもたちを見ると、このような態度を潜在的な合いことばにして、コンピュータと親密な関係を結んでいるように思える。

少し先には、コンピュータの方から人間に親しく近寄ってくることもありえよう。

もっとも、それだって、しょせんは、それをつくる人間の方がコンピュータに教えておくからだ、という答えが返ってきそう。しかし、それは原理的な答えである。実際にはそう理屈ではわかかっていても、現に目の前に親しげな対応のできるコンピュータが現われたなら、話は別になろう。

幸い、まだコンピュータは、いかにもコンピュータらしい声で応ずる段階だから「フレンドリー」な関係についてはいろいろ面白いことを教えてくれる。

たとえばこんな問題である。

私たちが相手に話しかけるときに、相手の理解度をさぐりながら話を進めていく。時にはいいねい過ぎるほど

ことばを使い、逆に省略できそうなところはさっさと省略したりして。その場合、誤解されないようにしながら、省略がどのくらい可能か、と判断してみよう。余分なことを言わなくても話が通じることもある。家族同士、親友同士などがこの場合に当たると。また、反対に、内容は太したこととはなくても儀礼的なことばでソツなく飾るのがよいとされている場合もある。

知らない者同士の場合は、つい余分なことばも使わなくては話は伝わらないし、異文化を背景とする人たちの間では、その背景について説明しなければならないことも少なくない。

人間同士であるならば、ほぼ以上のような違いを心得ておけばよいだろう。しかし、相手がコンピュータだと、話はずっと複雑になる。コンピュータには、人間にそなわっているような知能はないし、共通の文化をもっているわけではないからである。

もうひとつ、面白い問題がある。

理屈っぽく表現すると、コンピュータの入力と出力の

メカニズムがまだ限られているために、コンピュータは、キーボードから入力して、ディスプレイから文字や数字が出力されるというのがふつうだ。

少し想像力を発揮して、もし、人間が声や身ぶり、手ぶりで入力したら、コンピュータも声や身ぶりで出力してくれたら——と考えるてみるとよろしい。

そういうコンピュータはまだ存在しないようだが、やがて生まれるかもしれない。絵や音や、身ぶりや音声などの入力を認知できるものも存在するが、まだまだである。

キーボード

さて、あのキーボードである。

なれた人には、あのキーボードは使いやすいものになっている。しかし、なれない人にとっては、「フレンドリー」どころか、冷たくって、よそよそしく、不親切なものである。

せめて、にっこり笑うまでの「反応?」ができないもの

か——と言った人がいた。

なるほど。文字でディスプレイ上に「ウレシイデス」と答えるコンピュータはある。だが自分の顔をほころばせて笑うコンピュータはない。だいいち、「顔」がない。ない「顔」を「ほころばせる」ことができはしないだろう。

そこで、話は奇怪になる。

「笑う」とはどういうことなのか。それはただ「顔」の筋肉を動かすことではない。「ほころばせる」という比喩が示すものは、そんなに単純なことではない。意味を発信し、その全体が和らぎを表現していることである。

みどり児の笑い——それはまわりの人との交流により生まれる。生きた反応である。一回きりではない。笑いと笑いの交信は連続していく。これは、コンピュータにはできないパターン認識だ。

インターフェイス

「インターフェイス」とは「ふとのあいだ」という意味であ

る。「インターナショナル」「インターカレッジ」等、よく耳にする表現もある。

「フェイス」は、ご存知の「顔」である。

したがって、「インターフェイス」とは、顔と顔とをつき合わせる間という意味だ。日本語には、親しく語ることを「ヒザとヒザとをつき合わせる」というように表現するいい方があるが、あのデンでいくのもよい。

このインターフェイスを、まず、機械と人間のそれと考えよう。そうすると、人間と機械が向かい合い、おたがいが交流し合う場、ということになる。

自動車は、いくつものインターフェイスをもっている。運転者は、自動車との間にインターフェイスをもつ。歩行者も自動車との間にインターフェイスをもつ。交通信号、交通法規、交通習慣、技量等がそれらの質をきめるが、まだインターフェイスは不完全である。だから、人間の側から自動車のあり方に対してつねに緊張して向かい合っていないなければならない。

運転することを学ばなくてはならない。習練や練習が

必要である。その上に注意が必要である。

インターフェイスが充実してくると、使いやすくなる。極端な場合、そのしくみを知らなくても使いこなすことができる。

人間同士のインターフェイス

と、考えているうちに、「インターフェイス」は、機械と人間の間ばかりではなく、人間と人間との間でも大切なものであることがわかってきた。

あらためて考えるまでもなく、友人、親子、夫婦、職場等の人間関係においてはインターフェイスが重要なはたらきをしている。

子どもが何かでいきり立っている。

あなたはその理由がわからない。あまり激しくいきり立っているものだから、当の子ども自身にも自分が何でいきり立っているのかわからなくなった——というようなことがある。

思いがけないインターフェイスだ。

初期のコンピュータにはこれに似たことがよく起った。

今日のように小型なシロモノではなく、真空管を何万本も使っていたから、巨大なるゲテモノ、バケモノであり、何よりもやたらに熱を出した。それだけでなく、よく真空管が切れたものである。

プログラムを変えるには、線をつなぎ変えねばならなかった。手がかかるシロモノだった。すぐこわれた。修理している時間の方が作動している時間よりも長かった。

何だか物悲しいような風景だが、幼ない子を育てていくとき、これに似たことをだれもが身をもって知る。いちいち、やってみせなければならぬ。なかなか思うとおりにやれない。あげくの果てには、いやがって放り出す。大人の方も、いっしょになって、放り出したくなる。

これは連想である。初期のコンピュータの話題はいろいろな本で紹介されているが、それを讀むたびに、初期

のコンピュータが、機嫌の悪い時の幼児のように、力み、いきり立ち、わめいているように思えてくる。

ある専門家にそのような感想をのべたところ、その人は笑ってこう答えてくれた。

「そりゃ面白いとえだが、第一世代のコンピュータは、子どもどころか、図体ばかり大きくて、食べ物ばかり食べて、ろくに仕事をしない巨人のようなものだった」と。

図体だけから判断してはいけない。「泣く子と地頭とは勝てぬ」とは古いたとえ話だが、「泣く子」は「巨人」以上に扱いかねることもある。

当方は、こんなことを心の中で考えながら専門家の話を聴く。これも「インターフェイス」の実践である。「フレンドリー」になると、専門家も気さくに応じてくれる。すると、当方も、ますます乗り気になって合いづちを打つ。

術語が少なくなり、専門家はしきりにタトエ話で教えてくれるようになり、笑い声も加わる。気のせいか、童

顔を見せるようになった。

対話的環境

「はい、はい。いやあ、なかなかいい質問ですね。それじゃお答えしましょう。コンピュータの歴史は短いのですが、その短かい歴史にはいくつかの飛躍がありますね。

二つの重大なできごとが起っています。それが奇しくも一九六〇年代でしてねえ。一つは、一台のコンピュータをもって、同時にいくつもの仕事をさせることが可能になりました。いちどに何人もの人がコンピュータを使っても対応できる。これをタイム・シェアリング・システムといいます。

みんながコンピュータのそばまでやってくる必要はないのです。各人は、自分の部屋にいてよろしい。そこから、遠く離れたところにあるコンピュータと話しかけられるというわけです。

もうひとつは、コンピュータが映像を出力できるよう

になったこと。これ、もうご存知ですね。

以上の二つの発明が結びつくのが一九七〇年代。もともと別なものだったのですが、この時に至って結びついた。その結果、今日の新しいコンピュータの源となるのですね。ですから、今日のコンピュータは、ディスプレイがテレビのテクノロジーと結びついているようになっています。」

異質なもののや別の流れが結びついてくるのを説明する専門家の語り口は、まるで少年のようというらしい。楽しくてたまらないという語り方である。「ネ、ネ、聴イテ」とせがむ子どものようにも見え、語りはじめはや、自分の語りにうっとりとしてしまうかのように見える。

「なるほど、それは面白いですね」

「そうですね。これですから、やめられません。パーソナル・コンピュータなどは、その延長上にできたのですからね。

別々なものが溶け合っていく時代なのですよ。あな

た、ご存知でしょう。例の『ちびくろサンボ』の話？
トラがぐるぐる木のまわりをまわっているうち、溶けて
しまうというあの話を。

あの話のようにメディアは融合し、統合されていきま
す。早い話が、放送と印刷とコンピュータの場合です。
もともと別々の、関連のない産業でした。それがどうで
す。コンピュータとテレビは近づき、仲良しになっ
し、コンピュータと出版も近づいた。新聞社へ行ってご
らんさい。活字を拾う作業は全部コンピュータでやっ
ている。出版とテレビはコンピュータを介添え役として
握手したのですね。いや、握手どころか合体したのです
ね。

交遊です。遊びながらどんどん自分を別の流れと結び
つけていきます。」

心なるもの

心というものもたぶん同じようにしてしだいに複雑な
はたらきをするようになったのではないだろうか。

コンピュータの歴史を見ると、その短い歴史の
中に、数々のドラマをもっていることがわかる。しか
し、その数々のドラマは、少し見方を変えてみると、粗
野で、ぶきっちょで、荒けずりな心がしだいに洗練さ
れ、上品になり、落ち着きをもつにいたるのを暗示して
はいまいか。

十代の終わりにガンバリヤの名の高かったAさんは、
幼児の頃は気短かで親に心配かけたのだそうだ。子ども
の頃オトナシイと見られていたBさんは、二十代のはじ
めにはアバレモノで通っていた。あれこれこんな事例に
ぶつかると、幼児の頃はすべてコントンとしていて、マ
グマが煮えたぎっているようなもので、将来どんな人間
になるのやら見当がつかぬといっても過言ではないら
しい。ひとつ明快なのは自分を制御する力が出てくるにつ
れて表にあらわれる特徴が違ってくるということであ
る。

時効になったから敢て書いてみよう。

かれこれ数十年の前のことである。某古書店で、某小

学校の学籍簿が売り出されたことがあった。こっそり中をのぞくと、知っている人たちの成績や素行が記入してあった。

どうしてそのようなものが売りに出されたのやら見当がつかなかった。ともあれ、手に入れて調べてみると、まことに奇々怪々の感がした。学業成績は別にして、そこに記入されている行動の特徴などは、ご当人の現在とはまるでかけ離れていて、信じられない。

「粗暴にして落着無し」と記入されている人が隠やかな人として尊敬されているし、「内気、覇気に欠くる」と記されている人が立派なリーダーになっている。記入した人たちに、そのことを教えてやりたいような気がした。

まちがいはいえない。時の流れの中で、これらの人たちは自分をコントロールする手だてを発見し、それを発揮したのであろう。

心とは、そういう自己コントロールの力が生じてはじめて落ちつきはじめるものらしい。

古書店の主人も、その学籍簿に記入されていたひとりである。ご本人は、そのことに気づいていたかどうか、わからない。にこやかな人柄で親しまれている氏の小学校時代の行動は何と記されていたか——はなはだ興味のあるところであった。

「引っ込み思案なり」とあった。

筆者の名もそこにあった。(だから高価でも買い求めたのである)何を書いてあったか。それは書かぬが花というものであろう。

ちなみに、あの学籍簿は、とくに焼却処分してしま
った。

(名古屋大学)